

# 私の『いわゆる鯨・捕鯨問題』



18世紀の捕鯨図

## 河 村 章 人

私はここ六年近く「セイブ・ザ・ホエール」の標語に代表される捕鯨反対、鯨類保護キャンペーンの渦中に身をおいてきた。しかし私自身は鯨を救えという側にも立つでもなく、鯨を獲らせろという側にも立つでもない。多少なりとも鯨類の生物学にかかわりを持つ研究者、あるいは所屬していた研究所員として、いや応なく、この問題にインヴォルブされてきたのである。したがって、私の立場というのは原則的に前のいずれの側でもないものであって、ここで述べようとするのは研究者が一般に問題をこうとらえ考えているのだ、という性格のものでなく、単なる私見とみなすべきものである。

いったいここで私はどのような論理を展開しようとしているのか、正直のところ原稿用紙を前にした現在でさえ、もひとつよくわからないのである。やや立場として無責任めいたことかもしれないが、私にとってこの『いわゆる捕鯨問題』はそうあっさりとは色分けされた側立つことも、かといって無色の中立であることもできない。いわば、それほど複雑な想いを抱かせる対象なのである。

× × ×

自然保護の活動は確かにむずかしく、大変なことだろうとおもう。本誌の編集者が初めて書く私に参考のためとって送ってくれた第十六号の井手貴夫氏の一文をみても当事者のご苦労は並大抵ではなさそうだし、実際、日常あれこれ見聞するにつけてもそうだとおもう。

それにしても、「セイブ・ザ・ホエール」の人々は何と根気強くもまた多少かたいあたまの持主なのだろうか。セールスは断わられたときに始まるというが、自然

保護、動物保護の活動とは、くだんの人々をみていると一派通ずるものがあって本当にねばり強い。特にここ何年かは、ただただ敬服するばかりであった。私のように物事に少々あきつぽい人間は、じつはこの鯨と捕鯨のことではとうのむかしにシャッポを脱いでいるのである。理屈を超越して信仰にも近い哲学でイエスカノーかと思われると、私はもう完全にお手あげである。

オーデュボーン協会、フレンド・オブ・アース、シエラクラブ、グリーンピース、WWF・JAPAN、IUCN関係、一般個人など次々と「セイブ・ザ・ホエール」の人々と接触することがあり、その都度、毎度のごとく判ったような判らぬような問答を小一時間もくり返すことが多かった。いわく、日本のような経済大国がまだ鯨を獲る必要があるのか、かくも世論を無視する理由や如何、(鯨肉は)食糧蛋白のパーセントにしかならないのは正当化の理由にならないし、食べもしないマッコウクジラを獲る論理や如何。第一、野蚕である。そして、あげくが日本に大豆の耕作地を貸す国だっているはずだ、ということになる。ま、理屈はいろいろある。要は、日本に捕鯨をやめさせればよいのであるから、鉄砲も数撃てば当るかもしれない。だからといって、私とて下手なことはいえぬのである。

いわゆる情宜というのか、アジティションには才豊かな人々の集団である。うっかりすると「日本の研究者(こういうときには一研究者ではなく、研究者全体がそうである)のイメージをつくり出す表現をとるのが(常)もこういってではないか」という風にはなしたがモデレートされてしまうおそれが多分にあるからである。

悪くいえば、少し理解をするような顔付をすると、それをうまく利用されてしまうのである。捕鯨に反対の研究者もいれば賛成のものがあったりも当り前なのであるが、これがそうであってはならないかのような論理が先行する。かかる人々や社会集団と接してみても私がつくく感じたことは、あるべきコミュニケーションというものがかくもむずかしきものか、ということであった。同じ事象であっても、それを考える論理構造の座標軸が異なると黒をも白といいふくめることができる。そんな感じをうけるのである。したがって、私には話をしていううちに、ことは鯨でも捕鯨でもなく、こうした思考過程を異にした一種の抽象概念の衝突であったように思われる。そして論義は常にパラレルであって、黒と白はいつまでも黒と白、決して灰色とはならないのである。つまり、この平衡が破れるとすれば、それは単なるパワーの大小でさまる問題であり、その結果がややもすると偏見と曲解に基づくキャンペーンともなつて表に出てくるわけである。この方が、無色の人を色づけるには好都合に違いなからである。かくして、一連のパラレル問答から私にのこつたのは、ある種の複雑な不信感と論をつくそうとすることのむなしさであった。

x x x

このように書いてくると、読者諸賢は私が捕鯨賛成論者であろうと想像されるにちがいない。自然保護協会の出版物に現にこう書くのは少々気がひけるが、私の場合ありていには条件つきである程度、捕鯨は存在が許されてよいのではないか、という考えに傾いている。多少なりとも鯨という地上最大の動物を研究する立場に

あつた者として、将来にわたつてもいくらかはあの不思議な巨人を手にとり触れつつ研究をつづけたいと願う下心があること、いまひとつは、実はこの方が重要なことなのだが、海と人間という場面の設定からくるロマンチズムである。私は細々にでもかまわない。ともかく捕鯨をつづけて欲しいのである。しかも、それはあの大海を駆け巡つて、シロナガスやナガスとかのジアイアントたちを獲るそれである。

イルカも鯨かとよく聞かれたものだが、確かに分類学的にはまごうことなき鯨目の仲間である。イルカと人間もその相互のかわりをいえば遠くギリシャにさかのぼるが、ここでは鯨目という動物群からくるマスとの関係ではなく、特定のインディビジュアルを獲とするいわば私的な関係である。一九〇〇年頃、ニュージールランドのクック海峡にいつも出没したリペロス・ジャックリというハナゴンドウのはなしなどはイルカと人間のかかわりばなしの典型であり、しかし、いわばワンサイドプレーの関係である。

ところで、私のいう捕鯨とは、職場言葉という大型捕鯨のことで、イルカは含まれない。日本では紀伊、伊豆、東北などではイルカもとつて食べている。しかし、イルカ漁に関するかぎり、私は獲ることに反対である。これを含めると、私のこれからの論拠がなくなつてしまふからである。

さてここまでくると、私のいう条件つき小規模捕鯨肯定論にふれなければならぬ。私は捕鯨を大海洋とヒューマンズ・アクティビティという大自然と人間との対比から、これをひとつの文化として認めたいのである。

メルヴィルの『白鯨』をして誰もが海のロマンを感じこそすれ、鯨を殺すのはけしからんとはいわれない。なぜか。私なりに考えるならば、恐ろしい大洋に乗り出した小さな人間がその英知と工夫と獲らし、しかし、まだまだ無力な道具だとしてシステムを以つてあの鯨を仕留めようかどうか、という極限の活動であるからではないか。そこで鯨とりの運の脈裡にあるのは何としても巨獣を仕留めるのだという刹那の願ひであつて、得られるであろう鯨油の樽の数ではないはずである。海と鯨と人、この三つすくみの活動舞台をその時代が演出する。漁撈ではあるが、フィッシングではない。これはあくまでホエーリングそのものであり、超ビッグゲームにおける人間の生きさまの文化である。

大西洋上に浮かぶアゾーレス群島。ここではないまおモビディックにみるのと同じ方法でマッコウクジラを獲っている。さしものグリーンピースやフレンド・オブ・アースもすべてこれには沈黙を守っているようだ。確かにアゾーレスの捕鯨は商業ベースのものではない。沖に鯨がみえると、郵便局や床屋のおやじさんたちが馳せ集まつて来て鯨を迫るのである。いわば、スポーツホエーリングとでもいえようか。しかし、魚釣りや狩猟ともちがう。あくまで命の保証はない。「裸のサル」が内なるものの中に確かに求めるルーツ、これまたユニークなローカル文化というカテゴリーに納めておきたい。

さて、次なるが問題の近代捕鯨である。これも結論からいえば、時代背景や道具だて、システムなどそれなりの発展があり、内容は必ずしも同じではない。けれども前二者とは一派も二派も通じるものであつて、アナロジ

カルの文化として認めたいのである。そこにあるのは、精緻を極めた近代技術と相も変らぬ大海原の未知なるものである。そして、捕鯨という一連の活動が完結性をもって存在するためには、やはり人知と経験を結集したブラサルプアがなければシステムとして機能しない。ここでは結局のところ「モビイディック」が単純によりきめの細かくなっただけのことである。人間の能力としてどうしようもないことは、メルヴィル時代と少しも変わらない。気象衛星がいくらバックアイスの情報を流してくられても、鯨はいちいち双眼鏡をのぞいて探索しなければならぬし、ひとたび海面に霧が立ちこめると、もう逆立ちしても鯨は追えないのである。

ただ現代の捕鯨はあらゆる技術を結集してするホーリングというトータルシステムがその極に近く完成された漁撈活動ではないかとおもうし、今日の捕鯨システムはもうすっかり日本独自のものとして成熟しきっている。これはまぎれもなく今世紀に生きたわれわれが持ち得た特異な漁撈文化にちがいがなく、いわば一種独特の無形文化財みたいなものである。その意味で、私はまず捕鯨を残しておきたいと思うのである。文化財は一度失われると、もう戻らない。自然や動物を沢山残すのはいいが、文化財として残しておきたいではないか。日本が海洋国家、海洋民族を標榜するのであれば、せめて漁撈文化のひとつくらいは無形文化財にしておいてもよいではないかとおもう。

とはいえ、それでは現状をしてすべてよしとするかといえ、これは明かに否である。すべての鯨種に対してそうではないが、漁獲の強度がとよすぎるし、すべてが

商業ベースというところにもひっかかりを感じるからである。この意味では、あからさまな商業ベースにおいて捕鯨が存在することには問題をのこす。今日、蛋白だ、食糧供給だといっても、一面では論理の矛盾は避け難く、ましてあのおそろしい世論とやらをはね返す礎とはなり得まい。個々の理屈には個々の反論が必ず存在するからである。そこで、もうごさかしい理屈の開陳はやめにして、ともかく無形文化財としての捕鯨を残しておきたいのだ、ということにすればどうであろう。

私の是とした条件つきである程度の規模の捕鯨というのは、こうした意味あいからすると国とか公的機関が管理をするもので、まずもうけはミニマムであってよい体制下におかれるべきものであろう。もちろん、獲れたものはそれなりに大いに利用すればよいが、それよりも大切なことは、この捕鯨システムが世界の研究者にフィールドを提供するものであってほしいことである。世界には鯨を研究しなくても捕鯨と縁がないために材料が手に入らず困っている人達が沢山いる。こういう人達に手段を含め手当をすることは、お金持日本のことならわけはない。乗組員には漁撈の歩合に代って研究調査がよくできたと思われたときに、研究協力歩合みたいなものを出す。もちろん文化財保存のためであるから獲る数は知れている。そうそう目くじらを立てることもあるまい。

無知や未知、偏見からくる不信任は恐ろしいし、内外を問わず研究者や文化人に源をもつ不正確な情報は、社会的影響力が大なるがゆえに注意深くなければならぬ。その意味からも、こうした国際的研究捕鯨システムから生まれるメリットは多分に共存への最短距離となる

にちがいない。

× × ×

私は三十年、民間の鯨類研究所というところに籍を置いていた。スポンサーは幸か不幸か漁業会社であり、捕鯨会社であった。鯨類研究所は毎年一冊ずつ英文による研究報告書を発行し、一九四六年の設立以来昨年で通算二十九号を数えた。もちろんビュアサイエンスとしての報告書であり、どの誰がみてもそれは明々白々の事実である。ところが、梨下の冠とはよくいったもので、捕鯨問題が表面化してこの方、当然の中傷にしばしば出くわすことになったのである。

日本は捕鯨業者がおかかえ研究者をもっているのが彼らのいうことは信用ならない云々、といった類のものである。残念ながらこうした中傷の張本人がしばしば文化人とか分野を異にする先生であったりするので、社会的にもいちいちがもつともだということになるのである。鯨の研究者仲間からは、何ひとつそうした馬鹿々々しいはなしは出てこない。いわば、当り前のことだからである。残念なことに日本においてもある世界的保護団体の会合の席で、ある大学の動物学者先生が日本には鯨の研究者などいない旨の発言をしたことである。これまた斯界では著名人であるだけに、おどろきもし、かつその不見識をけいべつしたものだった。私は自然保護の活動に水をさそうなど毛頭思ってもいない。シエラクラブの人々がカリフォルニアのレッドウッドを乱伐から護るため一本々々を買いとっているのはなしを聞いて大層感心したものである。海岸線の買とりとか類したはなしも多い中で、いざ私自身がそれをできるかどうか、となる

といさぎかうたがわしい。

ともあれ、この一連の鯨問題をかえりみるにつけ、目的に性急なあまりの不用意な発言や論理には高邁な理想とその実現をめざす運動であるだけに、首をかじげたい気持である。とりわけ、分野を異にする事象を云々しようとするには、それなりの努力がどうしても不可欠だと思ふ。ものにはそれなりの順序がある。現実ばなれをし

た思想だけでは前進も発展もむずかしい。殊に人間活動の介在する対象には慎重でありたいし、それへのアプローチは朱熹を護るのとは自と異つたもののはずである。コンサーベータータイプなことは同時に、コンストラクティブでもありたいと思ふ由故である。

今夏、十年間の鯨類研究所生活に終止符をうった。こ

れからはあの鯨たちとも多少は疎遠なことになるだろうと思いつつ北海道の新しい任地に向かった。その道中、乗り合わせたカーフェリーで船内の一隅が大きなアイヌの捕鯨図で飾られているのをみた。やはり、私にとつてはいましばらく鯨も捕鯨もそう簡単には縁が切れるものではないらしく、なんとも象徴的なことではあった。

(北大水産学助教授・浮游生物学)